

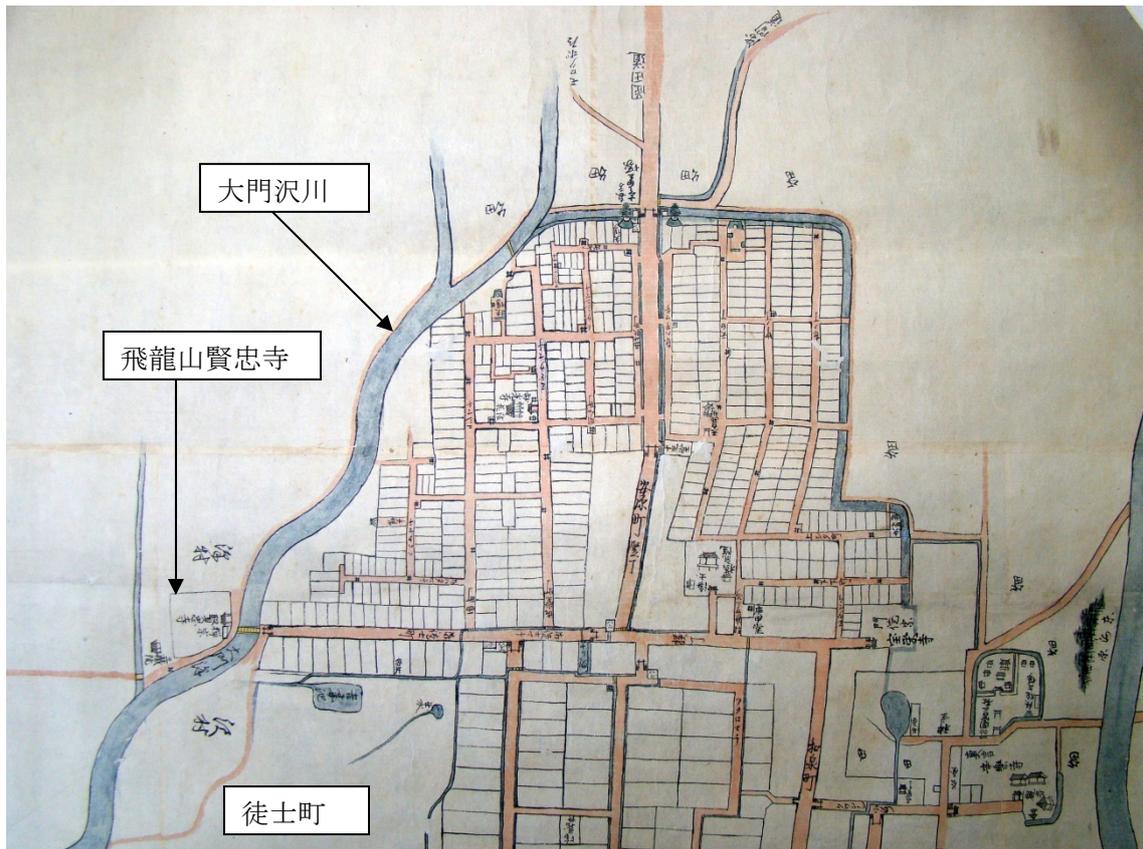
## 城下町探訪 49

2010/3/10

# 大門沢川と賢忠寺跡

徒士町<sup>おかちまち</sup>を東から西に進むと大門沢川の橋を渡る。さらにまっすぐ進むと、右手に「賢忠寺跡」がある。さらに西に進むと左手に中央図書館が見えてくる。

### 1. 城下町の北西側の町方と在方を分けていた大門沢川



上図は文化年間の城下絵図であるが松本城下町の北西側を区切る河川が大門沢川であった。「旧松本市史上」によれば大門沢川は岡田の矢諸の諸窪に発する。そこには昔、寿楽院というお寺があって寺の大門がありその所を大門沢と呼び、その所の池を大門池と呼んだ。従って川の名前はこの寺の大門にちなんだものではないかといわれています。大門沢川は芥子望主山から流れ出す水を集め岡田神社前から一級河川となり大門池付近で普門院の東の谷を流れてきた水を合わせ南流し沢村に入ってきます。

大門沢川は三つ流れから構成されています。東大門沢川は稻倉で女鳥羽川から取り入れられ伊深・岡田東区を流下し西町の北部で大門沢川に合流します。西大門沢川は城山の東側の水を集め岡田神社で南東に流れを変え、法務合同庁舎付近から南流して中央図書館の東側で大門沢川に合流しています。その後、大門沢川は北松本駅の北側から国道19号線をくぐり松島橋の北で奈良井川に注いでいます。



西大門沢川



大門沢川

大門沢川は細かく曲がっており流路を直さずに護岸工事がなされているようにみえます。川幅は広くはないが深く浸食されており現在でも道路面から3m位下に流れがあるところもあります。近世もこの様に深く浸食された大門沢川は町方と在方を分け、また要害の役割を果たしていたと考えられます。

## 2. 大門沢川の水害

大門沢川の左岸に展開していた武家地が江戸時代大門沢川の氾濫によって被害を被ったという記録は少ないのですが、「旧松本市史上」によれば、慶応元年6月3日の夜明け岡田の田溝池が決壊しその水が「中の池」と「矢作池」に流れ込みこの堤をも押し切って松岡村・沢村を押し流し西町、徒士町を経て北馬場・鷹匠町からお堀へ流れ込んだとあります。この時は武家地の屋敷が床上浸水の被害をかなり受けたと書かれています。城北の武家地は微高地に立地しており大門沢川の水害に逢わないように考慮して造られたと思われます。

## 3. 江戸時代、大門沢川のエピソード

### ① 弘化2年（1845）の堀浚いの水は大門沢川から引き入れられた。

この年2月上旬より4月12日まで郭内の内堀および北西の外堀の浚渫しゅんせつが行われました。一日300人の人足を各村々から動員して行われました。女鳥羽川の水を稲倉から大門沢川に落として、北馬場から外堀へ入れ、北不明門きたあかずのもんから弥勒院前を掘り割って、水を内堀に注ぎ、地蔵清水の辺から浚い始め本丸・土井尻迄浚いその泥水を犀川に流した。そのため新潟の海を濁らせたと伝えられています。（旧松本市史上458p）

### ② 新池は松本藩の藩校の水練場だった。

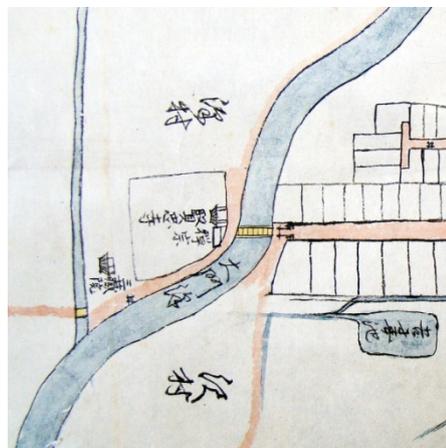
松本藩の水泳術師範は幕末上田繁左衛門知英でした。流派を神伝流といいます。彼は江戸と松本に教場を設けて教授していました。江戸の教場は隅田川両国矢の倉、松本は桐地

内「新池」でした。新池は大門沢川の右岸にあり、江戸時代に冬の雪溶け水や春の雨水を主として溜め灌漑用として用いられた溜め池です。熟達した者は新池で終日泳いでも疲れをおぼえなかったといひます。彼らは江戸に出ても両国から引き潮にのって隅田川を泳ぎ下り、品川沖砲台辺まで遠泳し、上げ潮に乗って帰ってくるというほどの腕だったということです。（「旧松本市史 上」）（「松本市史 第4巻旧市町村編IV」）

### 3、飛龍山賢忠寺は水野様のお寺

「信府統記」によって飛龍山賢忠寺の由緒をのべてみます。水野<sup>ただしげ</sup>忠重（法名瑞源院殿勇心賢忠大居士）が三州刈谷の城主の頃の牌所は<sup>りょう</sup>楞巖寺といひた。その寺に長源庵という<sup>たつちゆう</sup>塔頭があつた。忠重の子<sup>かつなり</sup>勝成は郡山城主となつたがこの時は瑞源院を建て牌所とした。勝成は備後福山に移りここに賢忠寺を草創した。勝成の子<sup>ただきよ</sup>忠清は刈谷城主となりこの時は<sup>りょう</sup>楞巖寺を牌所とした。その後、忠清は吉田に移るが、そのとき刈谷の<sup>りょう</sup>楞巖寺を吉田に移そうとしたがそれがかなわなかつたので古い屋敷を改修して長源寺とし、牌所とした。忠清が寛永19年（1642）7月松本に入封した時、長源寺住持を伴つてきて恵光院の寮を仮居とした。正保元年（1644）庄内組桐分の地に寺地を定めて堂宇を建て牌所とし備州賢忠寺の末寺とした。水野<sup>ただちか</sup>忠周の代、正徳3年（1713）寺名を飛龍山賢忠寺と改め本末寺が同寺号となつた。正徳4年には忠周の父水野忠直の室が鍋島光茂の<sup>むすめ</sup>女であつた関係で鍋島家の霊牌を安置することになつた。その後、寛政12年（1800）に建て替えられている。

右の地図で見ると賢忠寺の寺域は南は御徒士町の西の突き当たりから大門沢川に沿つて広がつていた。現在、徒士町の通りは行き止まらず、更に西に伸びているが、現在の道路の南側と北側に寺域はひろがっていた。



飛龍山賢忠寺に文政8年（1825）8月26日、時の老中水野出羽守の一向582人が江戸から中山道を通つて京都に上る途中水野家の廟所参りのため玄向寺に立ち寄られた。

玄向寺の廟参りが終わった後、家老が乾瑞寺に代参した。賢忠寺には物頭清水新十郎が代参している。（河辺文書「文政八年 水野出羽守様御通交御行列帳」）

享保10年6代忠恒が改易になつた後、伯父の<sup>ただよし</sup>忠毅が名跡相続が許され7〇〇〇石が与えられた。8代忠友は將軍家治の信任を得て老中になり、安永6年（1777）には沼津2万石城主となり天明5年には3万石になつた。9代<sup>ただあきら</sup>忠成も老中となり文政4年（1812）と12年に1万石づつ加増された5万石となつた。この時玄向寺に廟参したのはこの忠成である。

#### 4 飛龍山賢忠寺跡

明治3年から4年にかけて吹き荒れた松本藩の廃仏毀釈の政策によって賢忠寺は廃寺とな



った。現在賢忠寺跡に案内板が設置されており、奥が墓地になっている。墓地入り口右側に「首貸せ地蔵尊」がある。この地蔵尊は水野氏が三河から運んで安置したものといわれている。

伝承によれば、この地蔵尊の付近に住んでいた子供が朝夕信心して供養を怠らなかった。ある夜、強盗がこの家におしり家族を惨殺して家財を持ち去ったが、この子供だけが助かった。翌朝地蔵をみると地蔵尊の首が切られていた。誰いうとなく地蔵尊を身替わり地蔵と呼ぶようになったという。

案内板には「この地蔵の首を借りて行って祈願すると子供の病が治るといので首は方々へ借りられていった。たまたま首を返さない人がいて長く首なしでいたが近くの石工が新しい首を造ってさしあげた」と書かれている。



この賢忠寺跡から西へ進むと写真のような大日堂がある。大日堂は天文20年(1551)ころ小笠原長時がここに戦勝を祈願したと伝えられる。堂内には大日如来座像・不動明王像二体・毘沙門天像四体が安置されている。この大日如来は室町時代の作と見られ賢忠寺に納められていたものが廃仏毀釈後ここに納められたのではないかとの推測もある。